ックアウトが用意されたからにほかならない。国家権力は、諸級の事情から見て全都段階で統一行動のない九日を選んで大学に乗入した。したがつて、官憲の導入については決定していたとしても、具体的に何時入るかについては七日か八日の段階で教授会メンバーに知らしめられたと考えるのが妥当であろう。しかし、これでは教授個人に何時もの逃げ道「知らなかつた」を与えることになるので、少なくとも農工学部の過半の教授には七日段階で電話（生田地区共闘から）連絡したのである。よつて、九日のロックアウトは一部の教授にあつては緊急教授会（八日）の制に既に知つていたことになる。それでも、何一〇のロックアウトに抗議する意志表示がなかつたことは周知の通りである。

われわれ助手共闘のうち、九名は八日の夕刻から校舎の一部（農場本部）に泊り込んでロックアウトに備えた。また、われわれと行動を共にしてきた法学部の福井助教授は和泉校舎の一室に泊り込んだ。しかし、福井助教授は官憲ならぬ法学部教授会メンバー二名によつて強引に九日の早朝かつぎ出されてしまつた。われわれは生田校舎正門にて、高木工学部長が官憲に見守られて退去命令をハンドマイクで伝えているのを聞き、その最終警告と共に正門に向い白いヘルメットを被つた教官団と職員に憎しみを叩きつけた。「闘争をつけていない者は教員でも逮捕する」ことになつているから出てくれ、という小宮寧嬉長と吉本教務委員の言葉によつて、われわれは門外に出ることにした。少なくともわれわれはこの事態が八日の教員懇談会（本部学士会分室：教員宿舎）の席上においても予測していた。それにしても、実際この状況を目の前にすると然りにふるえ、或る者は目に涙さえ浮かべていた。この状況を、如何なる立場で経験するかということは今後大学に籍を置く者にとつて重大なことである。考え方の違いとか、人間それぞれの生き方があるとか云う言葉は空しい響きしかもつていない。この日（一〇月九日）を迎えるまで、教授会メンバーは何をやつてきたと云うのだろうか。われわれはそれぞれの感じ方ではあつても、われわれ以外の教授会メンバーとの非和解的断絶を確認した。この気持は頑絶という言葉で云いつくせないものなのかも知れない。

この日を契機にわれわれの立場は明確化された（ビラ〝全明教職員・学生に訴える〟一九六九・一〇・一三明大助手共闘発行）。このことは、全共闘の学生諸君においても同じことである。大学当局が、話し合いの相手を全共闘から学生一般に切換えた一〇・四全学集会の席には明大における全共闘の存否が問われたのに対し、全共闘は一、〇〇〇名以上（独自の組織力）の動員をもつて答えた。しかし、反面組織実態の脆弱性を暴露したが、一〇・九のロックアウトを境に真の全共闘の内実が問われた。徹底抗戦かエスケープかという教術論争が八日の深夜から九

ックアウトが用意されたからにほかならない。国家権力は、諸級の事情から見て全都段階で統一行動のない九日を選んで大学に乗入した。したがつて、官憲の導入については決定していたとしても、具体的に何時入るかについては七日か八日の段階で教授会メンバーに知らしめられたと考えるのが妥当であろう。しかし、これでは教授個人に何時もの逃げ道「知らなかつた」を与えることになるので、少なくとも農工学部の過半の教授には七日段階で電話（生田地区共闘から）連絡したのである。よつて、九日のロックアウトは一部の教授にあつては緊急教授会（八日）の制に既に知つていたことになる。それでも、何一〇のロックアウトに抗議する意志表示がなかつたことは周知の通りである。

われわれ助手共闘のうち、九名は八日の夕刻から校舎の一部（農場本部）に泊り込んでロックアウトに備えた。また、われわれと行動を共にしてきた法学部の福井助教授は和泉校舎の一室に泊り込んだ。しかし、福井助教授は官憲ならぬ法学部教授会メンバー二名によつて強引に九日の早朝かつぎ出されてしまつた。われわれは生田校舎正門にて、高木工学部長が官憲に見守られて退去命令をハンドマイクで伝えているのを聞き、その最終警告と共に正門に向い白いヘルメットを被つた教官団と職員に憎しみを叩きつけた。「闘争をつけていない者は教員でも逮捕する」ことになつているから出てくれ、という小宮寧嬉長と吉本教務委員の言葉によつて、われわれは門外に出ることにした。少なくともわれわれはこの事態が八日の教員懇談会（本部学士会分室：教員宿舎）の席上においても予測していた。それにしても、実際この状況を目の前にすると然りにふるえ、或る者は目に涙さえ浮かべていた。この状況を、如何なる立場で経験するかということは今後大学に籍を置く者にとつて重大なことである。考え方の違いとか、人間それぞれの生き方があるとか云う言葉は空しい響きしかもつていない。この日（一〇月九日）を迎えるまで、教授会メンバーは何をやつてきたと云うのだろうか。われわれはそれぞれの感じ方ではあつても、われわれ以外の教授会メンバーとの非和解的断絶を確認した。この気持は頑絶という言葉で云いつくせないものなのかも知れない。

この日を契機にわれわれの立場は明確化された（ビラ〝全明教職員・学生に訴える〟一九六九・一〇・一三明大助手共闘発行）。このことは、全共闘の学生諸君においても同じことである。大学当局が、話し合いの相手を全共闘から学生一般に切換えた一〇・四全学集会の席には明大における全共闘の存否が問われたのに対し、全共闘は一、〇〇〇名以上（独自の組織力）の動員をもつて答えた。しかし、反面組織実態の脆弱性を暴露したが、一〇・九のロックアウトを境に真の全共闘の内実が問われた。徹底抗戦かエスケープかという教術論争が八日の深夜から九

学園反乱の個別性と普遍性

一　序

七〇年前夜。全国の大学そして高校に反乱の風が、吹き荒れた。否現在も、又明日も吹き荒れるであろう。反乱の質が単なる個別的な面ばかりでなく、質的に普遍性を持つたが故に、安保といつた枠のある、なし、にかかわらず、洋の東西を問わず、世界が一つの環でつながつている事を示している。仏の五月革命、米の黒人、反戦を中心にした大学闘争、西独でも、戦後世界史が、質的に転換して行くとしたらこれらの潮流によつてであろう。

その様な情況にある学園反乱の質を明確化させる意味で、この文章を進める。残念ながら、第一次羽田闘争を間にして、四年間を学生で過した私は、反乱側に位置していたわけではない。最初の二年間は逃避的ノンポリとして、次の二年間は消極的ラジカル（全体の相対値として）として存在していた。しかし学生として決して、学園自体とそれを取巻く諸問題に、無関心で居たわけではない。第二次羽田ではほんのわずか、エンタープライズ闘争では、東京の支援闘争に、そして一〇・二一国際反戦デーに（一九六八年）は平和三人委員会として、参加した。そんな私が、学園反乱全般に亘つて、冷徹な情況分析をなし得るわけではない。第一次羽田闘争で、山崎君が死んだとき、その追悼式で彼に花を捧げた時、自分自身の心の中の一部分あるいは全部かも知れないが〝つまりエゴ的な面〟やらねばならないのだが結局、何一つやらない心は、殺さねばならなかつたのだ。たとえ全面的に殺せなくても止揚すべく、何らかの努力をしなければならなかつたはずなのに、戦前の日本でも、戦争反対、軍国主義反対をたとえ小さな声でも、叫べた時もあつたろうに、日本人一人一人が、それをやらなかつた報酬として、親兄弟をも戦死させてしまつた。アメリカでさえも、徴兵カードを自から焼く人々が居る。それでも戦争は続くし、戦争反対をさえ言わない人がいる。言わない事によつて、暗黙の内に支持している事に気付かない。「声なき声」も声をあげる必要があるのだ。学園の中でも、学生が武装したりすると〝暴力〟さえしなければ、自分もやるのにと、暗に自己の問題なのに、いわ

以外の何物でもない。徹底的に、バリケードの中にはいつて学生と話合おうとさえしなかつた全教官が、一〇月二七日、一〇月二八日の両日（工学部にあつては）研究室の整理点検のために、腕に腕章を巻いて学内にはいつた。ここに、現在的教員の真の姿があるように思う。

学園反乱の個別性と普遍性

一　序

七〇年前夜。全国の大学そして高校に反乱の風が、吹き荒れた。否現在も、又明日も吹き荒れるであろう。反乱の質が単なる個別的な面ばかりでなく、質的に普遍性を持つたが故に、安保といつた枠のある、なし、にかかわらず、洋の東西を問わず、世界が一つの環でつながつている事を示している。仏の五月革命、米の黒人、反戦を中心にした大学闘争、西独でも、戦後世界史が、質的に転換して行くとしたらこれらの潮流によつてであろう。

その様な情況にある学園反乱の質を明確化させる意味で、この文章を進める。残念ながら、第一次羽田闘争を間にして、四年間を学生で過した私は、反乱側に位置していたわけではない。最初の二年間は逃避的ノンポリとして、次の二年間は消極的ラジカル（全体の相対値として）として存在していた。しかし学生として決して、学園自体とそれを取巻く諸問題に、無関心で居たわけではない。第二次羽田ではほんのわずか、エンタープライズ闘争では、東京の支援闘争に、そして一〇・二一国際反戦デーに（一九六八年）は平和三人委員会として、参加した。そんな私が、学園反乱全般に亘つて、冷徹な情況分析をなし得るわけではない。第一次羽田闘争で、山崎君が死んだとき、その追悼式で彼に花を捧げた時、自分自身の心の中の一部分あるいは全部かも知れないが〝つまりエゴ的な面〟やらねばならないのだが結局、何一つやらない心は、殺さねばならなかつたのだ。たとえ全面的に殺せなくても止揚すべく、何らかの努力をしなければならなかつたはずなのに、戦前の日本でも、戦争反対、軍国主義反対をたとえ小さな声でも、叫べた時もあつたろうに、日本人一人一人が、それをやらなかつた報酬として、親兄弟をも戦死させてしまつた。アメリカでさえも、徴兵カードを自から焼く人々が居る。それでも戦争は続くし、戦争反対をさえ言わない人がいる。言わない事によつて、暗黙の内に支持している事に気付かない。「声なき声」も声をあげる必要があるのだ。学園の中でも、学生が武装したりすると〝暴力〟さえしなければ、自分もやるのにと、暗に自己の問題なのに、いわ

ゆる人間力のせいにしてなぜもったらかいるとでもたくさん。私もかつては、その大多数の中の一人だった。不鮮明な群衆のなかに、非鮮明な己れを隠したがつたものだ。他人の体温で自己を温め、自己のエネルギーを燃やしはしない。社会的肥満児。しかし情況は変化し深化した、反乱の質は、疎外された主体にも問いを発し始めた。あなたにとつて?!戦争とは、幸福とは、学問とは、生活とは、こうして自己にとつて、自己の内乱が始つた。客観的には、非反乱から、自己の内部における反乱＝心の内乱を経て、徐々に反乱側にたとうとしている。そうした人〈私〉が、対象的自己を通に、この文章を進める。

二　学園をとりまく内外情況について

その様な自己の主体に問いかけられた問題は、一面情況によつても問いかけられていた。しかしその情況からの問いかけは、その情況を分析する側からの変動を鋭きにして、一定的な論は持ちつつ、同じ命題で、同じ主題を問うていたはずである。数千年前の昔から。

人間・主体的人間に問われて来たものと、時の流れ的な情況の波動が、うまく重なつたとき、反体制であれ、人間の解放であれ、反戦であれ、その運動は、一定の山を持ちつつ結晶するのだ。山が無限大に大きくのびるとき、革命と呼ぶ。今日安で起きて、動いている運動が、革命となるかどうかは、この過渡した山の形いかんであろう。後世の人が判断する所であり、われわれは、それを顧み質に立つている。一口に表現すれば、学園反乱は、〈近代〉諸体系の〈知的体系への〈人人間解放〉からの反乱であるだろう。近代知的体系がどの様なものだつたのかは、次の様に、結果的欠陥から考察し得る。〈近代〉資本制社会〉において、知的生産過程及びその生産物又再生産過程を、絶対的独立下においた大学（特に東大等の講座制に端的に見られる）は、知的体系を細分化＝専門化し、機械的に生きようとする主体が要求する全体知を無視し、ラジイカルな問を回避し、自己を自己の知的体系からも疎外し、没意味化して来たのが〈近代〉の〈知〉である。そしてそれを全面的に支えてきたのが、資本制社会＝体制であつたのだ。自己の存在と、その存在が影響する行為に対して、改主体的に無批判的に放置して来たのが、外的な情況に身をゆだねる事を拒否し、日常性の支配のもとから脱却し、抵抗をはじめたのが、学園であつた。資本制社会において、抽象的な形式論理の日常的支配に対して、外的、内的に管理・抑圧されていた被支配層そのものが、層として解体しはじめている。反体制そのものが、体制として否定されている。〈内なるベトナムを否定する〉〈内なる体制を否定する〉。

以上の様な外的情況にあつた学園の内的情況はどうであつたのであろうか？

終戦を境に、占領軍を主体にして、大学の理念そのものが改革された。学校教育法第五十二条によれば、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的導徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」と規定している。しかし学問を根底にし、教員・職員・学生の三者を中心とした、戦後学園共同体は、一九六〇年安保を境にして、三者の環であつた学問の崩壊と共に、もろくも崩れ去るのである。体系としての学問が、やはり学問としての対象でしかなかつたが故に、幻想的共同体理念が崩壊したのであろう。

一九四五年の終戦とともに、天皇を中心とした、全体主義が表面的にではあつたが、崩壊の第一歩を印した。

そしてGHQを中心に学園でも、占領政策をもとに、幾多の改革がなされていつた。ヤルタ・ポツダム体制内の平和と安全の為の脅威にならぬ様に、さらにアメリカの目的を支持する国家としての再建であつたのが、戦後の情況である。教育再編の時代は五〇年で終り、それ以後教育再々編が始まつた。資本主義社会の形成と統一的〈秩序〉の回復を目指した支配階級と、学園内支配階級が目的意識的にせよ、結果的効果にせよ、相呼応して行なっている。大学法等に対しての国大臣路線、大学立法に対しての新自主改革路線は、政府――ブルジョワジイ――と学問との矛盾を地で行つたものである。それは経済の高度成長に伴い、日韓条約、ベトナム戦争を境に帝国主義的段階に突入した日本が、諸産業の再編過程に取り残した中で一番大きいのが、教育産業＝学園であつた。年間収入総二五〇億の日本・東大を基礎に、資本総額五〇〇億、年間収入四〇億の明大等の、国家反私学独占資本の再編としてさらに、強力な国家管理社会の形成として学園現場を突破口に教育資本再編成があるのだ。慶応、早稲田、明治、中央と続いた巨大私学資本の授業料闘争と、日大、東大の反乱とはその意味で異質なものではない。一九六〇年を境に学生の増加〈技術者の進展は忘れるといつた理由で、学部・学科が理工系に偏重した形で進められていつた〉。電子工学、応用物理学、合成化学、機械工学、製薬化学、又、経営学、産業社会学、産業工学、情報工学等日本国総理大臣の表明する如く、国家社会＝独占資本の要請に、大学が自主的に答える形で学部・学科の増・新設が実現している。

これを学内で推進しているのが、大学のボス的教授であり、各種政府委員会に名を連ねて、研究室を基盤に、人脈統制の中で、政府ブルジョワジーのイデオロギーの貢献を実行しているのだ。しかし膨大な金辺あつての頂点であり、東大が全国大学教員系列や学問的頂点にいられるのも、文教政策もあるが医学部等に表出しているボス教授の存在＝、底辺（多くの私学）が存在している為にである。

三　抵抗としての反乱

政府、自民党を表面的頂点とした独占資本は、経済的、文化的な面や、個人の諸権利等々の、〈個人が共同体で生活していくのに必要なあらゆる諸関係を支配している〉。そこには、支配と被支配の関係＝階級が存在している。支配機構を支えている、最大の要因は、社会における経済上の生産手段の所有関係にある。社会体制そのものは、一九世紀末に起きた、産業革命以降に確立し、現在帝国主義として表現される様になつた。しかしその中で、多くの労働者、市民、産業予備軍としての学生は、人民＝被支配者の為の社会を作ろうとして、「膨大な血」を支払つたのも事実である。というのは、資本制社会が、体制そのものの論理として全ての自己が、他人の犠牲の上に成立するからである。資本主義体制が成立、世界の戦争に主体的に参加した時は、イギリスを発源とした植民地国家であつた。第二次大戦を境に新植民地主義＝経済的支配へと移つていつたが、戦争ないし戦争的情況に関係した筆頭は、米国を中心とした帝国主義国家である。ベトナム戦争によつて、自己繁栄を続けている日本。資本主義そのものの原理である、他人の犠牲＝（極端には戦争）によつて、自己が幸福になることを拒否するのは、必然的に資本主義そのもの、現在の社会体制そのものの拒否へと続くであろう。部分的拒否から全体の拒否へと深化している。自己否定の論理は運動の進展に伴い、必然的に現出してくるゆえがあつたのだろう。一方における被害者、一方における加害者が正直な所である。そんな情況下にあつた人間としての学生は、未来の労働商品として、現在からも未来からも徹底的に疎外されている。労働商品再生産機構そのものがベルトコンベヤーとして又疎外された学問下にあるが故に、社会の中でも、自動車産業にみられる様に、労働機械として位置付けられるのだろう。底辺にいて、無権利状態に置かれていたが故に、一番根底的な視点に立つて全ての問題をみて、実行する事が出来たのであろう。〈株式会社〉日本大学の学生集団や、東大の医学部と被抑圧集団が、もつとも〈ラジカル〉な反乱を創造する故が、そしてもつとも強い故が、理解できるだろう。

四　個別学園闘争から社会総反乱へ

一九六七年一〇月八日の第一次羽田以来、一九六九年一〇月一〇日の〈新左翼〉の統一戦線の形成まで、一連の学費闘争から、政治闘争の主役として登場した彼らは、あらゆる体制の中で、全ての権威を否定し、全ての既制の概念に、ラジイカルな問を発し、自からをも含めて〈存在の有効性〉を追求している。その意味では、文化革命と共通している項があるだろう。しかし全部が全部、最初から運動の質が、その様なものであつたとは言い切れない。抑圧されていたものとしての普遍的集団が、

一度闘争を展開するや、質的深化をとげるのは、彼らが決定的疎外されていたが故に、当然の事である。闘争は常に、支配＝抑圧側からでなく被支配＝被抑圧側から起るのであり、それが、全人民の社会が形成される日まで、続くであろう。日大においても、東大においても明大においても、階級が存在し、資本の論理が貫徹している限り、常に闘いが起きる素地は準備されており、管管規であれ、処分問題であれ、カリキュラムの問題であれ、導火線のりかえを問わず、同一の質を持つのは当然である。本来大学の中心である学問の質いかんを問わず、学問の世界における科学論や認識論が、生活空間における科学論・認識論となり得ないと目覚した時、学園の反乱の質的変換が形成されるのだろう。社会の存在が、学問的対象としその域外出ないが故に、〃存在の有効性〃の立場から攻撃されている。よく言われる様に、結果が誤りであるときは、その結果を導入せしめた認識が誤りだったのである。自己の変革を伴い、社会変革へと発展し得る学問として出直さない限り、個別学園反乱は続くであろう。そして〃有効性ある存在〃の変革の集約と連帯という意味＝全共闘運動は出現するし、学問が個別的に崩壊にとどまらない理由もそこに見られる。戦後形式民主々義の崩壊とも出現し得る。

知的独占組織＝教授会の内実

現体制、資本制分業社会にあつて大学の占めている役割はどこにあつたのだろうか。現体制を支配している大きな柱として、国家権力と共に、経団連、日経連を中心として君臨する独占資本と、そこに働く労働者に管理者として君臨する所の知的労働者階層が存在することは明らかである。この知的労働者階級の生産の場が現在の大学に他ならない。そこには、学生を現体制にあつていかに、体制の需要に合つた商品、品質検査（卒業試験）を通つた規格品として、送り出す役割を果しているのがまさに現在の大学である。その中にあつて相互不批判、相互不干渉、（相互扶助）をもつて戦線としての知的生産物の独占をはかつて来たのが教授会にほかならない。これはまさしくクラフトユニオンなのである、が故に、本来あるべき姿としての真理とは、大学の自治とは特の本質を思考することなく、何もしないことを、隠蔽するために、教授会を開催的なものとし、社会的階層階級として君臨することによつて、物質的経済的利益を得て来たのである。斯様に考えることによつて、大学特別措置法に反対し、デモに参加したことも、そして立法成立後の「ナリフリかまわない」あの態度（一例、一〇。九早朝に機動隊員に守られて白いヘルメットをかぶり、腕章をつけて学内に入り退去命令を出すこと）も説明出来るのである。即ち自からの生活の場（物質的経済的利害関係）において自からの利害を守るためにのみ反対したに過ぎないし、その後において、少なからずの教授達が体制内改革を唱えていることの内実は大学の帝国主義的再編を許容することによつて、国家権力から与えられる知的特神労働者としての知的独占を公有する以外の何ものでもないのである。

今、学問をし研究をするのに一番問われているのは何かをとらえ直してみる必要がある。われわれも含めて研究し、学生を教育して来たものの内実は何であつたのか、現体制にあつてどういう視点に立つてその本質をとらえなくてはならないのか、「他はまじめにやつて来た」という人は多い。当然の事が誇らしげに語られることすら土台おかしいのだが、それだけ不まじめにやつて来た人が多いことを教授自からが証明している。こういう人は論外として、ではその「まじめにやつて来た」ことの内実は何なのか、自分の研究そのものを社会総体の中でとらえ直すことが出来ず狭い視野の中で没主体的に、無批判的に行なつて来た事は、どういう結果をもたらしたか。研究活動を例にとれば、多くの人が同一の研究を行なつている中にあつて、その中の穴場を見つけて論文にまとめ学会に先がけすることによつて学会での自己の立場を如何に優位にするか、又このことによつて自己の知的独占を如何に保つて行くかの手段に過ぎない、これが多くの研究者の実態でないのだろうか。その動機を知的好奇心の発露としようと勝手だが、大学における研究はそういうものであつてはならないのだ。主体性をもつた人間として生きる為に、例へば働く人間が如何に肉体労働から解放されなければならないかということのみを考えた場合でも果して現状の大学で行なわれている学問・研究がどの様に人民に奉仕しているだろうか。生産面に直結している所での問題点は非常に多く、解明しなければならないものであるにも拘らず単に低次元の職能的な問題として一蹴し、何等応えようとはせず、今日の地位を守つて来た。そしてこれからもこのことを続けることによつて、自からの延命をはかろうとするのが教授と呼ばれる人達の実体である。であるが故に現在の入試を初め学内で行なわれている矛盾に満ちた諸制度を温存することにより、実践の経験を持たない若い学生を相手にして過去の業績を武器としてヒエラルキーを貫徹しようとしているのである。

社会に大学を開放して今まさしく一番学ぶことを必要とされている人達＝生産面に直結して悩み、そして問題意識をもつている人達）にこそ大学が応えてやるべきであり、そこに大学の研究官なり教授なりの存在の意義があるのではないか。これらのことをとらえ直すことが学問であり、研究である。今のまゝの体制内にあつて研究者自身がいかに問題意識をもつて研究しようとも、それはこの資本主義社会の一つの重要な要素となつているものであり人間を収奪・搾取する道具とならざるを得ないものである。教育体系にしても独占資本を基礎とした金融寡頭制経済構造に見合つた「教育」として形成されていることは明らかであり、この様な教育体系は様々な知識と能力ともつた労働者を生産過程へと押出する「労働力商品生産」体系であつて、この様な労働力商品を供給して行く機能を負わされた教育体系はますます物化され非人間化されて行くのである。

教授会という名において何が為されて来たのだろうか。明治大学学部教授会規定によれば全十四条からなり、その七条は教授会は左の事項を議決するとして、「教育および研究に関する事項から始まつて十二まで、カリキュラム、入学転部等、学生の賞罰等、特選研究生の推薦：、教授、助教授：の人事機、……等の広汎に亘つているが、これらの事は日常的にはすべて、工学部においては各科会議（教室会議）に諮されて、ここで大筋を決め教授会では只単に承認したり、議決するだけの形骸化された事務的な機関になり下つている。従つて多くの教授達は「あんなものはくだらない」と言い、従つて「出席しない」と公言する者も居る。これらの帰結として教授会へ出ないことを条件に官学の停年退職者を招致してくることもありうる。ところが形式はどうしても整えなくてはならない（即ち五条の半数以上の出席がないと流会になつてしまう）ので、事実、昭和四二年一〇月一三日付で、高木工学部長の名をもつて各科科長宛に教授会開催についてという文書を配らなくてはならないことになる。その内容は一〇月一二日に予定した教授会がある学科の教員全員欠席の為に流会になつた、まわりて残念である。又定刻に集まる人はきわめて少なく一〇月一三日も定刻の五分後にやつと定数に達した、これでは困るという主旨である。又事務職員によれば食事が出ないと集まりが悪いとか、……。これは何を物語るだろうか。全く教育・研究に無関心であり、やる気のない集団であり、精神構造の質魔者集団以外の何ものでもない。したがつて前にも述べた様に自らの物質的経済的基盤が脅やかされそうになると、日頃口にしていた真理の探求も、研究の自由も、学問の自由も放り出して（現実には何もやつていない。又過去においても全く遊のことが行なわれて来た。それは工学部拡充計画（昭和三四年）において日経連・経団連からの代表者を呼んで産業会からの要望をそのまゝ具現化するような工学部拡充計画を作つたことで十分であろう。）ナリフリかまわぬ醜態を曝け出すのである。

われわれは、この闘争以前まで過去十数回以上に亘つて工学部長や農学部長、あるいは、各科の教授達と話し合いをもつて来た。その度毎に「教授会は駄目だ、本当にしようがない。どうしたらいゝのか教えて欲しい」と言われ、学部長も「君達のいう事はもつともである。私も大学（工学部）をよくする為に一生懸命やるから君達もどんど